

幽玄

題字

高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.6

平成5年11月6日発行

建設の歩みを進める

横浜能楽堂（仮称）

横浜市が現在西区掃部山公園
内で建設工事を進めております
横浜能楽堂（仮称）は、その建



設の節目として、去る六月二八
日、市内各界からの臨席を得て、
起工式を実施いたしました。

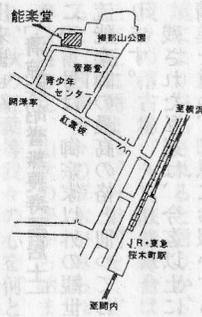
当日は、梅雨の合間の好天に
めぐまれ、高秀横浜市長以下横
浜市関係者、工事関係者のほか
市会、能楽界、地元住民など参
加者二百人に及ぶ起工式となり
ました。

式典では、横浜能楽堂（仮称）
建設構想委員会委員を務められ
た能楽各流の皆様に、祝言小謡
「四海波」を披露いただいた後、
市長を始め各界代表八名による
献入れが執り行われ、能楽堂完
成へ向けて進み始めました。

今後、能楽堂の工事は、本年
度内は主に基礎部分の工事を、
平成六年度には躯体の工事、最
終の平成七年度には旧染井能舞
台の復原を始め、内装仕上げ、設
備工事を行い、平成八年三月の
竣工へ向けて進めてまいります。

横浜能楽堂（仮称）の最大の
特徴は、御承知のとおり、明治
八年創建の由緒ある旧染井能舞
台を復原活用するところにあり
ます。この舞台を中心に、四八
六席の見所を持つ、落ち着いた
雰囲気格調の高い能楽堂の完
成を目指しております。

この他に楽屋、焙じ室、装束
の間等の能公演に必要な諸室を
備え、二階には研修室、無料公
開の能楽資料の展示コーナー、
喫茶室、地下一階には本舞台と
同規模の広さをもった練習舞台
等を配しておりますので、市民
の皆様は、謡・仕舞の練習や発表
の場として気軽に御利用いただ
きたいと考えております。



完成後の能楽堂では、能楽各
流派の出演による定期能や各種
能楽公演の開催、一般市民や中
学・高校生を対象とした能・狂
言教室等の普及事業の実施を予
定しております。

能楽堂が広く市民の皆様に関
連する施設となりますよう、
現在、これらの企画・運営の準
備を進めておりますので、今後

も引き続き、暖かいご支援をお
願いいたします。

（横浜市市民局文化施設課）
（写真説明）各流の先生方によ
る「高砂」。起工式会場にて。

五流大会は盛大に 平成六年度は 第一〇回大会を

第一〇回大会を

第九回五流合同横浜謡曲大会
は、平成五年五月三十日(日)午前
十時三〇分より、久良岐能舞台
において開催された。各流ベス
トメンバーを揃え、素人の大会
としては、水準の高さを誇る年
一回の恒例の行事であるが、本
年は、素謡八番、連吟六番、仕
舞十一番、独鼓、独調、一調各
一番という、まことにり沢山
な内容であったが、円滑に進行
され、出演者共、二〇〇余名の
参加が得られ盛大であった。

明平成六年度は第一〇回記念
大会になるが、五月二十九日(日)
に予定されるので、各流ふるっ
ての御参加を期待するものであ
る。
この大会は、会場の制限と、
時間の問題があるので、連盟加
盟のグループのみの出演となっ
ているが、愛好者の方々の積極
的な参加、観覧をお願いしたい。

「横浜能の歴史」販売中

昨年の第四〇回横浜能を記念
して、当連盟で刊行した「横浜
能の歴史」は、横浜における能
楽界の動きを細大もらさずとら
え、四〇年間横浜能の番組すべ
とと、主要な舞台の写真をおさ
めた、貴重な記録である。
定価七〇〇円で販売中。

横浜能楽連盟の 会費の納入について

連盟会費は、個人と団体法人
の二種類です。個人の申し込み
は自由。団体はそれぞれの流派
へお申し出下さい。

（個人）入会金千円、年会費千
円。
（団体・法人）入会金二千円、
年会費二千元。

*振込口座
横浜信用金庫本店
口座普通三八九三五
横浜能楽連盟
市庁内郵便局
振替口座
横浜一―二五八〇四

横浜能楽連盟



観世元昭先生の

御逝去を悼んで

観世流師範 伊藤 文治

七月二十七日、第十二回横浜新能は、二千人の観衆の見入る中で行なわれていました。

落ちゆく夕陽を背に能「胡蝶」があでやかに演じられていたその時、観世元昭先生は入院中の病院で、御逝去されました。誠に悲しいことでもあります。

元昭先生と横浜とは非常に御縁が深く、横浜能には第一回から四十年間、また横浜新能にも毎回御出演下さって、その芸風は、横浜の愛好者達をいつもいつも、幽玄の世界へと誘い深い感銘を与えて下さいました。更に横浜能楽堂建設構想委員を市から委嘱され、その代表とし



て貴重な御意見をいただいております。

御歳も未だ五十六才、これから益々芸に深みが増えられるものと、御期待申し上げておりました矢先、本当に残念に思います。先生もさぞかし御無念だったことでしょう。

思えば、先生の御人徳も、能の御姿も、スケールが大きくて御立派でした。一見、豪放のようでもその内に込められた、華麗な風格と、繊細な味わいのある御舞台の姿が偲ばれてなりません。

また国内のみならず、メキシコオリンピックの際には日本芸能紹介のため、文部省より派遣されたことを初め、韓国、フランス、更にはオーストラリア独立二百年祭等々、外国での御公演

も多々ありました。昭和六十三年度芸術選奨文部大臣賞を受賞され、また能楽協会理事長の重責も果され、観世流のみならず能楽界を代表する方でありました。先代御宗家亡き後は、観世流理事長の要職にもおつきでした。

然し、もうあの御姿にも、朗々としたお声にも接することは出来ません。

「清涼院昭蒼無畏壽雪居士」この雪号は、御宗家以外の観世流能楽師の最高の格と伺っております。

残された私達は、今迄以上に精進を重ね、御恩にお報いする他ございません。

御冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

「能のルーツ」を考える

横浜梅若連合会 笠原 松寿

私が謡を初めて既に十余年になる。能は古典芸能としては古い方であり、高尚で奥が深い。大きな声を出すので健康やストレス解消に役立つが、生来私は音痴なので余り上達していない。その為ではないが私は前々から能の起源や歴史に興味をもち、調べているが中々面白い。

観阿弥・世阿弥が世にでた14

世紀以降は文献もあるが、それ以前のものは非常に少ない。能の大成者、世阿弥が著わしたと言われる本が約20冊あるが、その殆どは明治になってから発見されたものである。それ迄はこれらの本があることさえ解らなかつたようである。これは世阿弥がすべての著書を秘伝書という形をとり、中世芸道の特長として後継者にだけ相伝することにしてきたからである。

ご承知の方も多いと思うが、「能」とか「能楽」とか言われるようになったのは明治14年以降で、それまでは「申楽」または「猿楽」と呼ばれていた。一般的に奈良時代に中国から渡って来た「散楽」が起源といわれているが、散楽は手品・曲芸の類であり、また11世紀頃の猿楽も風刺のきいた滑稽・物真似の劇の様なものであった。それは現在我々が観ている能とは似ても似つかぬものである。

その頃の猿楽は、神仏に奉納する猿楽と大衆芸能としての猿楽とがあったが、観阿弥・世阿弥は上流社会へ受け入れられる様な芸能とする為、近江猿楽の曲舞節を取り入れたり、無駄な動きを極力省略するなどの工夫を加えた。そして文中元年「一三四年」京都今熊野に於いて將軍義満の御前能を実現する。

その時から猿楽は今までの田楽にとつて替わるのである。それ以降、能役者は將軍家や諸大名の庇護を受けることになり、猿楽も発展していくことになる。

能のルーツ、現代までの経過を調べ、古人の苦勞を偲ぶのもまた興味深いものがある。また世阿弥が著わした「風姿花伝」も単なる演劇論ではなく、今の我々の人生論・処世論としても大いに役立つものである。

『六浦』と称名寺

横浜金剛会 福本 敏子

去る八月、久良岐能舞台にて『金剛流謡曲と仕舞の集い』が催され、その番組は神奈川を中心に関東地方にゆかりの曲で編成されました。この事を聞いて私は亡き主人が横浜金剛会十周年（昭和五十年）の記念行事に『六浦』と『放下僧』の古跡の金沢八景に足を運び小冊子にまとめたのを思い出し、探し出して懐しく読み直してみました。六浦の地名は金沢区の町名として現存しますが以前は久良岐郡六浦荘村で、古くは鎌倉への海の玄関口として、又風光明媚な海岸に、遊人墨客も多く訪ねたそうです。

小冊子の『六浦』の章には次

のような記述があります。

京急金沢文庫駅下車、東へ四百米ほど行くと「六浦」の謡跡(称名寺(金沢弥勒寺)がある。入口の総門はカヤブキで物さびた趣きがあり本堂までは池をこえてかなり隔たっていてこの寺の規模が大きかったことが知られる……。北条義時の孫実時の創建で本尊は弥勒菩薩木像で運慶の作といわれている。境内にある金沢文庫は稀書・珍書・良書を集蔵し古来有名である。

謡曲『六浦』の主題となった楓は本堂に向って左の池の端にあり謡曲に用いられた冷泉院為相の歌の碑が立てられている。いかにして此一本に時雨けん

山に先立つ庭の楓葉 為相 為相郷は藤原定家の孫にあたり、父為家の没後、和歌の所領のことで兄為氏と争い、それを訴えるために母の阿仏尼が鎌倉へ下った。その時の紀行文が十六夜日記である。

池の端の青葉の楓は地上三四尺のところまで幾本かに抜分れた小葉もみじであったが、今は枯れて切株のみが大きさを思わせており、傍に植えついで小さい代りの木が植えられている……。

七月の良く晴れた日に、あら

ためて称名寺を訪れてみました。

週日のためか人もまばらで池の端でスケッチを楽しむ人、文庫の喫茶店で緑を眺めながら会話を楽しむ人々など落付いた昼下りに境内を囲む筆捨山に登り実時の墓にも詣で森林浴を満喫して本堂脇裏の葎が茂る広い沼地に降りてきました。そこには網を手に虫を追う子供達が元気に遊んでいました。

金沢文庫駅への帰路には『放下僧』ゆかりの瀬戸神社にもお詣りして心ゆくまで謡跡めぐりを楽しむことができました。



▲称名寺

稽古場紹介 (久良岐教室)

金春流 服部 喜一

平成元年に「謡と仕舞の教室」が久良岐能舞台に開講され、我々金春流も回を重ねること五年

となりました。一方、受講者は

過去に謡、仕舞の心得があった人、或は全く無経験の人と千差万別でありました。当初はご多分にもれず、声の出し方、謡い方などわからず、声は上ずり、かすれてくる等、しばしばでありました。我々金春流の稽古には、新進気鋭の守屋泰利師の好指導を得て、何とか自分なりに謡うことが出来るようになったことは、一つの進歩ではないかと考えます。現在は第一、二回の教室の終了者で誘いあわせて

初めて謡を習いだした曲、六浦にちなんで「むつらの会」として毎月3回稽古をつけて頂いている次第ですが、これも初心忘るべからずの故か、又、人は環境により左右されると言うか、我々の稽古場、久良岐能舞台は、三方丘に囲まれ、一步門をくぐると、四季折々の草木がみられ、春は梅の花、山吹の花から始まり、秋の紅葉等我々の心を何となく和ませてくれます。謡にも四季があるように、能舞台の周囲も四季があり、池の野鴨も、時折事務所に入り込んで来て餌をねだるとか、一方稽古場に入ると、前面舞台には高名な画家平福百穂画伯が描かれた鏡板があり、橋掛りを透して、裏の竹林の眺めも雅趣に富んだものです。この様な環境の中で、雑事

を離れて稽古に専念できるのもむべなるかなと思われま

す。例年七月には、久良岐能舞台主催の「金春流謡曲と仕舞の集い」や年一回催される五流合同横濱謡曲大会等では、素謡、連吟、仕舞など、日頃の成果を発表していますが、昨年より今年と、その成果は刮目すべきものがあります。謡を習い始めてはや五年たち、それぞれの曲についてみると、何かしら人間的情念が感じられる思いがしますが、



連吟「竹生島」むつらの会 平成5年 五流合同謡曲大会

いかなもののでしょうか。例えば、熊野の母に対する思い、通小町における深草の少将と、小野の小町、お互いの情念等々であるが、やはり自分自身でそれぞれの曲にある、シテの思い心を素直に謡い込められたらと思うものであります。

素朴な能舞台

宝生流 秋山 尚

私が故高橋徳之先生に入門したのは昭和三十年で、約三十年強お稽古をして頂いた。徳之先生は当流の大先達松本長先生の直弟子であり、長節を厳しくも温い慈愛に満ちたご指導を賜った果報者であります。徳之先生には東京、仙台、福島その他で約三百名の直弟子がおられ、同門会として「之宝会」の名称で活動して参りました。小生も若輩ながら昭和四十年早々より同門会幹事を仰付けられ、若さで行動力だけで勤めて参りました。或時、恒例の同門全国大会を福島県石川支部で開催したので準備する様にとのご下命がありました。石川支部は福島県中央部(現福島空港隣接)に位置し、歴史的にも風格のある落ち着いた小さな町であります。会員は女性丈であり勿論能舞台などある筈もなく大変に戸惑い、思案に暮れました。然し先生の熱心さにうたれ、地元会員の方々と相談の結果同町の中学校講堂を使用することとなりました。学校の講堂という限られたスペースに能舞台を設置するわけで、素人の我々には至難な技であり小生も急ぎ参考文献等で俄か勉強を始め、地元会員と近接支部

の協力のもと舞台作りを開始した。鏡板には立派な松の絵が描かれた幕を借出し、目付柱や橋掛りの欄干等は地元の大工さんに依頼し、更に一の松、二の松、三の松は近辺の山より松の木を切り出し据える事により何んとか舞台らしく整った様でした。圧巻は「小督」に用いる出し物の小柴垣、片折戸を須賀川支部により制作された。水道橋で使われるものと遜色ない出来映えで大変感服した次第です。又演能に使われる面、装束等は貴重なものであり、災難が心配で地元旧家の土蔵に保管して頂くと、会が終わるまで気の休まることはなかった。大会当日は田舎町での演能は初めてのものであり大評判となり、新聞、テレビでも大きく報道された。又地元の中学生を多数招待し情操教育の一環として役立ったものと思えます。二日間にわたる能会も素朴な舞台で地元会員の直向きな努力、会員一同が懸命に務める姿は誠に清々しいものであった。最近では新能をはじめ華美に流れている事に比べ、能楽の原点に返った思いがし、今になっても当時の有様が鮮明に蘇り良き想い出になっております。

初心の気持ち

喜多流 渡辺 範夫

平成二年九月九日、久良岐能舞台は蟬時雨の中にありました。月曜日ごとの練習日に因み、月謡会を名乗った私達の初舞台は「月宮殿」でした。二十代、三十代の若輩者が、生まれて初めて素謡を人様の前で吟ずるのです。この日のために、せめて格好だけでも紋付も帯も袴も皆で一緒に詠えました。気持ちを一つにし、とにかく真っ直ぐに、大きな声で堂々と謡おう。それだけを念じて謡いました。

君の恵は有難や、君の恵は有難や……。謡い終えると、お腹がすうっとしほんで、代わりに心地よい風が身体の中に入ってくるのを感じました。その心地よさが忘れられなくて、私達謡のいにいに蝉は一夏の生命とはならず、今日に至っております。

伝統的であるがゆえに、能や謡曲と私達若輩者との距離は、よほどの幸運に恵まれぬ限り縮まるものではありません。私達の幸せは、師出雲康雅先生をはじめ、諸先輩の方々のあたたかい愛情に恵まれたことです。対面し、声でもって声を教え導く謡の稽古ほど、愛情深いものはありません。先主の凜とした声

に導かれて、私達は自分の声を聞き、声を曲に揃えようと稽古を重ねます。声の形を成すに至るまでの道のりは、厳しく険しく、どこまで行っても果てがありません。しかし、そこでかく汗の清々しさに、正坐の脚の痛みも忘れてしまいます。

私事で恐縮ですが、学生時代を映画と演劇に明け暮れ、これも勉強と歌舞伎座や国立劇場に通ったこともありました。しかし、伝統芸術の煙ったさ以上の感想を持ち得ませんでした。今謡を習いはじめて、今日にまで伝える伝統の懐深さを垣間見るにつれ、そこにあるのが愛情の力であるとしきりに感じます。

このような幸せに巡り合わせてください。すべての方に感謝申し上げます。お返しに、稽古に励み、芸の道をより深く学んでいきたいと思っております。

連盟の動き

(平成五年四月〜一〇月)

- (連盟の記録)
- 四・一六 横濱能楽連盟平成五年度総会 開港記念会館
- 五・一二 横濱能楽連盟常務理事会 横濱市役所
- 五・三〇 横浜五流合同謡曲大会(連盟主催) 久良岐能舞台

- 六・四 横濱能楽堂建設促進会総会 横濱商工会議所
- 六・二一 横濱能楽連盟常務理事会 横濱市役所
- 六・二八 横濱能楽堂起工式 掃部山公園
- 七・四 金春流謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 七・二〇 横濱能楽連盟 常務理事会
- 八・二二 金剛流謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 八・二六 横濱能楽連盟理事会 横濱市役所
- 九・五 横浜宝生流連合大会 久良岐能舞台
- 九・一二 喜多流謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 九・二四 横濱能楽連盟常務理事会 横濱市役所
- 一〇・一一 こうなん文化国際交流協会主催 久良岐国際交流の集い(梅若会参加)
- 一〇・二二 横濱能楽連盟理事会 横濱市役所
- 一〇・三〇 観世流謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 一一・三 富久謡会(観世)秋の会 川崎能楽堂
- 一一・二一 春己会(金春)大会 久良岐能舞台

各流・主な活動予定

(平成五年十一月以降)

- 一一・二八 海謡会大会 久良岐能舞台
- 一二・一九 宝生流教授囃子会 県支部大会 久良岐能舞台
- (平成六年度)
- 二・六 横浜金剛会 久良岐能舞台
- 二・一二 宝生流謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 二・二〇 第二回環能会(文化振興財団主催) 港北公会堂
- 三・五 磯子芸術文化祭(観世・梅若・宝生・金剛各流参加) 久良岐能舞台
- 三・一三 観世流梅若会謡曲と仕舞の集い 久良岐能舞台
- 五・二九 第一〇回五流合同謡曲大会 久良岐能舞台

あとがき

各流の御協力で原稿がよく集り、今号も掲載出来なかった名文がいくつも出てしまいました。やむをえず一流一文になったことを御了承下さい。(T・S)

